

JET からの手紙

私の長ぐつ

北海道釧路市教育委員会 外国語指導助手
Justin Randall (ジャスティン・ランダー)

1,000 円の長ぐつ

日本について考えると、私の長ぐつを思い浮かべます。黄色くて大きい、真っ黒な履き口の下に明るい赤い馬蹄のロゴがある長ぐつです。他の人が履く高品質のものではありません。私はそれをリサイクルショップで 1,000 円で買いました。つま先はややゆるく、足首周りは広いですが、十分にフィットします。長ぐつアイスホッケーをするとき、氷で滑って大けがをするのを防いでくれます。その長ぐつは高級ではないかもしれませんが、日本での私の時間を象徴する、特別なものです。

未知のまちへ

5 年前、私は北海道の東側に位置する辺境のまち、釧路市にやってきました。電車で札幌を出発してから時間が経つにつれ、世界から遠ざかっていくような感覚を覚えました。

来日前、私は釧路市についてあまり知りませんでした。釧路市は、冬は寒いですが雪はほとんど降らず、夕日の美しい、霧のまちです。阿寒摩周国立公園と無限に広がる太平洋の間に位置するそこは、東京の繁華街や伝統的な京都の寺院、大阪の叙情的な輝きとはまったく異なる世界です。

全ての始まり

私は釧路市教育委員会で勤務し、外国語指導助手 (ALT) として小学校と中学校を交互に担当しています。一時期は市の中心部から離れた田舎の農耕地や山間の地域でも教えていました。そこでお世話になった先生の一人が、長ぐつアイスホッケーの大会に出場する彼女の

チームに、私を誘ってくれたのです。長ぐつアイスホッケーとは一体何なのか、そのときの私には全く分かりませんでした。

長ぐつアイスホッケーについて

釧路町が発祥の「長ぐつアイスホッケー」は、冬に誰もが楽しめるスポーツです。選手は肘と膝の保護具、ヘルメット、長ぐつを着用し、パックではなくボールを使用します。各チームにはフォワード、センター、ディフェンダー、ゴールキーパーのポジションがいます。フォワードはディフェンダー側に入ることはできませんが、他のプレイヤーは自由に動き回ります。1 試合は 10 分間で、引き分けの場合はシュートアウトで決着がつきます。簡単なスポーツですが、プレイしていると複雑になります。



スケートではなく長ぐつを履いてプレーします

長ぐつアイスホッケーでは、最速に達するまでに必要なのは 1、2 歩です。しかし、速度を上げるとスムーズに止まることができない可能性が高まる、というリスクがあります。このスポーツはアクセル全開で、ブレーキはありません。一回一回のターンや走り出しのタイミン

グの誤りが、まるで子ども向けのアニメキャラクターのようなバタつきにつながるかもしれません。速度を落とすには両足を踏ん張って滑り、停止につながます。選手たちは、体を回転させてボールを守りながらパスを狙います。

巧みなベテランたちは、ボールを持って走り回るとき、まるで踊っているかのようです。彼らは信じられないほどのスピードコントロールで、軽く方向転換しながらディフェンダーを抜き去ることができます。私とは、レベルがまるで違います。



プレー中はとても真剣です

ALT でチームを結成

しかし、私もプレーを続けるにつれて成長しています。パスはより正確になり、シュートも乱れが少なくなりました。もちろん、意図しない動きや派手な転倒をしてしまうこともあります。しかし、私は上達しています。新しいことを学ぶ楽しさを思い出しています。そして、もっと重要なことは、地域のコミュニティにより深く関わることができていることです。

私だけではなく、去年私たちは ALT によるチームを結成することができました。JET プログラムによって結



試合での一コマ

ばれ、オレンジのジャージを着た私たちは、(恐らく唯一の) オール外国人の長ぐつアイスホッケーチームとして氷の上に立ちました。

試合に勝つことができず残念ではありましたが、ある意味で私たちはチャンピオンだったと思いたいです。新しい挑戦に臨む冒険者。それは、私たち JET プログラム参加者が体現するものではないでしょうか。

5年間で得たもの

私の JET プログラムでの残り時間は短く、約半年しかありません。時折、5年前の自分を思い出します。深い緑色の北海道の山々を通る、あの電車に乗っていた自分を。未知の霧の海岸に向かいながら、興奮と少しの恐怖心を抱えて。何が待っているのだろう。日本での生活はどうなるだろう。どんな人に会うことになるだろう。その答えは今、私の古い黄色のゴム長ぐつを見ればわかります。



チームの皆さんと

プロフィール



Justin Randall

(ジャスティン・ランダール)

アメリカのオースティン・ピー州立大学を卒業後、2019年にJETプログラムで来日。現在は英字新聞ジャパントゥタイムズに寄稿し、東北道道の未知なる魅力を紹介している。JETプログラムの終了後は、言葉と写真の両方で活躍するジャーナリストを目指す。